

自分だけの「めぐり双六」をつくろう

～博物館展示を読み解く生徒たち～

逗子開成中学校・高等学校 片山健介

1. 実施学年及び教科・領域

学年 中学校第1～高校第2年選択希望制授業 / 領域 社会科・歴史的分野

2. 学習のねらいと博物館の活用との関連について

(1) 単元名 「天下泰平の世の中」「社会の変化と幕府の対策」

(2) ねらい

①学習指導要領との関連

『中学校学習指導要領』（平成29年3月）「2内容」「A歴史との対話」では、課題追究活動を通じて、「基本的な内容」理解とともに「資料から歴史に関わる情報を読み取ったり、年表などにまとめたりするなどの技能」の育成について取り上げる。また「3内容の取扱い」「(3)近世の日本」では、「近世の日本を大観して、時代の特色を多面的・多角的に考察し、表現すること」の必要性について述べる。

本実践では国立歴史民俗博物館（以下「歴博」）第三展示室の「近世」展示を活用し、歴史的事象を自分なりに解釈しまとめ、他者との話し合いを通じて、「めぐり双六」を制作することで、近世社会の特徴や時代を多面的・多角的にとらえることをねらいとした。

②単元の目標

- (ア) 班の中での意見交換を通して、資史料や展示資料に興味・関心を持ち、まとめることができる。（社会的事象への関心・意欲・態度）
- (イ) 資史料や展示資料を比較・検討し、まとめることができる。（資料活用の技能）
- (ウ) 発表や双六体験を通して、近世社会を多面的・多角的に考察することができる。（社会的な思考・判断・表現）
- (エ) 近世社会や文化の特色についての基本的な事柄を理解し、考えることができる。（社会的事象についての知識・理解）

(3) 博物館との関連

①活用方法 「来館型活用」

②活用資料

- ・第三展示室『浜浅葉日記』を元にした「海付きの村に生きる」展示
『四季農耕図屏風』（複製 斎藤秋圃画 1840（天保11年））

(4) 指導観

本実践は、逗子開成の選択制授業・土曜講座の取り組みのなかで実施した。土曜講座は、中1～高2までが自由に選択し参加する一回完結の授業である。筆者は、『平成27・28年度博学連携報告』において、「とび双六」を作成する実践を提案させていただいた。実践時の生徒たちは、初対面同士の生徒が多いにも関わらず、双六制作を通じて展示と向き合い、

協業した上で双六を完成させた。展示を活用することで教室では出来ない学びとなった。詳細は、同報告書やホームページを参考にされたいが、今回はその実践をふまえて「めぐり双六」の作成を行うこととした。前回の実践と同様に、現行の教育に「主体的に学ぶ姿勢」、「課題の追究」、「課題を解決する活動の充実」が十分でないことを念頭に実践に取り組んだ。

また、筆者の勤務校は海洋教育を一つの柱とする中高一貫校である。しかし、理科系の探究学習はいくつかの実践があるものの、文科系の実践が少ないのが現状である。今回、歴博の展示において、「海付きの村」展示をテーマとしたのは、同展示が勤務校の近くに位置する三浦半島大田和村に残された『浜浅葉日記』(*)を元に制作されたものであったからである。海が目の前にある江戸末期の村の生活は、具体的にどのようなものだったのか。そのような問いを生徒自身に伝えることを意図した。学校が位置する地域の歴史を博物館で学ぶという視点を重視した。

*『浜浅葉日記』は、横須賀史学研究会編『相州三浦郡大田和村浅葉家文書』として第一集～第六集（1980）まで発行されている。また辻井善彌の一連の著作は、同日記を読み解くうえで参考書として有益である。『牛馬のいた風景』（夢工房 1998）、『幕末のスローフード』（夢工房 2003）、『幕末のスローライフ』（夢工房 2006）、『幕末の農民日記にみる世相と暮らし』（丸善プラネット 2011）、『幕末を旅する人々』（丸善プラネット 2015）など。

3. 指導計画（博物館内授業 4 時間扱い）

（1）研修室（1 時間扱）

| 過程 | 時間 | ○学習活動及び内容 | □指導上の留意点 ■評価の観点 |
|---------|------|---|---|
| 事前指導 | | ○ 事前課題プリント「双六の思い出」配布、課題に取り組む。 | |
| 当日導入 | 5 分 | ○ 博物館内でのマナー、諸注意を確認する。 | |
| 展開 ① | 10 分 | ○ 課題を発表する。 ○ 他者の発表を聞き、双六体験を共有する。 | □生徒自身に双六体験をふりかえさせることで、授業の動機付けとさせる。 ■他者の意見と自分自身の意見の異同を考えることができたか。（関） |
| 展開 ② | 25 分 | ○ 「農村」・「漁村」のイメージについて考え、問いに答える。 ○ 「海付きの村飛び双六」を体験する。 | □テーマとなる「農村」と「漁村」のイメージを問いかけることで、双六体験の題材についての関心を育む。 □遊び方について適宜アドバイスするなかで、巡り双六と飛び双六との違いについて伝える。 ■双六の遊び方や特徴を積極的に考えることができたか。（関） ■農村と漁村の違いを双六から読み取ることができたか。（技・知・関） |

| | | | |
|-----|-----|--|--|
| まとめ | 10分 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 体験した感想を自分の言葉で語る。 ○ 体験を通じて「飛び双六」の特徴を考える。 | <ul style="list-style-type: none"> ■ 多様な双六がつけられたことに気付くことができたか。（知） □ 「マス目」を紹介することで、近世の村の生業と結び付けて考えさせる。 ■ 「農村」「漁村」のイメージの違いに気付くことができたか。（知） |
|-----|-----|--|--|

（２）第三展示室内・研修室での授業（3時間扱い）

| 過程 | 時間 | ○学習活動及び内容 | □指導上の留意点 ■評価の観点 |
|-----|-----|--|---|
| 展開① | 10分 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 第三展示室内において、「海付きの村」展示、『四季農耕図屏風』展示の解説を聞き、メモをとる。 | <ul style="list-style-type: none"> □ 二つの展示を比較する視点が大切であることを伝える。 ■ 関心をもって聞くことができたか。（関） |
| 展開② | 40分 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 「海付きの村」展示より、漁業に関するテーマを読み取り、当日課題①にまとめる。 【参考資料Ⅰ】 ○ 『四季農耕図屏風』展示より、稲作に関するテーマを読み取り、当日課題①にまとめる。 | <ul style="list-style-type: none"> □ 時代の特色を「農業」「漁業」のテーマに則して「めぐり双六」制作に反映させるよう適宜アドバイスを行う。 ■ 農村と漁村の違いを展示から読み取ることができたか。（技） |
| 展開③ | 70分 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 班ごとに、各人の当日課題を確認・共有する。 ○ 各人の当日課題を組み合わせることで、各班一つの「めぐり双六」を制作する。 | <ul style="list-style-type: none"> □ 時代の特色を「めぐり双六」制作に反映させるよう適宜アドバイスを行う。 ■ 班のメンバーで協力し、二つの展示内容を、近世という時代の中に位置づけ、「めぐり双六」のゲーム性にも注意をはらって制作することができたか。（関・思・技・知） |
| 展開 | | <ul style="list-style-type: none"> ○ 他班の制作した「めぐり双六」を体験する。 | <ul style="list-style-type: none"> □ 「めぐり双六」の細部の文言にも注目するよう促す。 ■ 「めぐり双六」体験を通して、近世 |

| | | | |
|------|-----|---|--|
| ④ | 20分 | | という時代の特色や文化を知り、考えることができたか。(知) |
| まとめ | 10分 | <input type="radio"/> 制作した「めぐり双六」に関する講評を聞き、ふりかえりを行う。 <input type="radio"/> 他班の双六について、一言アドバイスシートを通して評価する。 | <input type="checkbox"/> 各「めぐり双六」の中で表現された近世社会の特色や文化についてまとめる。 <input checked="" type="checkbox"/> 他班の双六を近世という時代の中に位置づけ、評価することができたか。(思) |
| 事後活動 | | 帰校後、事後プリントを確認する。 | |

4. 実践の概要

参加者合計 14 名（中 1：11 名、中 2：2 名、高 1：1 名）に対して、以下のような流れで行った。

- ・ 研修室…事前課題の確認と共有、昨年度制作「飛び双六」体験
- ・ 第三展示室…解説と個人当日課題取り組み
- ・ 第三展示室・研修室…班課題取り組み
- ・ 研修室…制作双六体験、振り返り

(1) 研修室での動き

①事前課題「すごろくの思い出」

研修室では、事前課題を確認した。事前課題は「すごろくの思い出」というタイトルで感想を課しておいた。この課題では、生徒自身の過去の「双六」体験を振り返らせ、参加者でその体験を共有した。以下の文に代表されるように、ほとんど体験していない生徒や双六を自作した思い出など語る生徒がいた。

- ・そもそも双六をやったことがない。(J1)
- ・小学校で自分たちの 6 年間の思い出を元に自分たちで卒業すごろくを作ったことがある。(J1)
- ・家族で双六(人生ゲーム)をした。何の目がでるかによって人生が変わるので、はらはら、ドキドキした。(J1)
- ・ぼくの双六の思い出は、小学校の卒業アルバムの中にはいつか書いていた六年間の思い出双六です。その双六の遊び自体もよく家族でやっていて、とても面白く、また何とんでも小学校のころの行事や普段のクラスメイトとの生活など、いろいろなことがいつでも思い出せるということです。ぼくはこの双六で遊ぶ時はもちろん楽しんで遊びますが、なつかしい思い出も一緒に思い出すことができます。これからもときどき卒業アルバムの双六をやりたいこうと思いました。そして小学校の思い出を大切にしようと思います。(J1)

本の付録とか、後は家族でした人生ゲーム。(J 1)

・ぼくはあまりすごろくになじみがなく、ほとんどやったことがありません。唯一、児童館にあった恐竜のすごろくを友達と遊んだことです。そのすごろくは振出しに戻ってしまうこともあり、それに何回も引っかかってなかなかゴールにいけなかったことを覚えています。(J 2)

・双六というとドラえもんの正月遊びセットか何かについてきたものをはじめ、ボードゲームというのかもしれないが、人生ゲームなども見方によれば、双六の一部なのだろうと思う。(S 1)

②展示に誘うための問いかけ(「農村」「漁村」「海付きの村」に関する問い)

すごろくの題材とする第三室の展示「海付きの村」への関心を高めておくために、「農村」「漁村」「海付きの村」に関するイメージについて質問した。①「農村」・②「漁村」・③「海付きの村」のそれぞれのイメージを自由に記させ、「村」に関する知識を確認・共有することを目的とした。生徒の主な答え(ママ)は以下の通りである。なお、受講生徒は中1が主体でもあったため、小学校時代(受験勉強含む)の学びそのままのコメントが多い。「なぞの石ひ」などは、総合的な学習の時間や探究学習などに由来する記憶とのことであった。一方で、「貧富の差が激しい」「租を納められない」などは、中2生徒のもので、歴史学習における古代の「農村」イメージが混在しているように思われた。なお、勤務校は海の目の前にある。「漁村」といえば、逗子市小坪が有名であるため、その地名を挙げる生徒を期待したが、一人もいなかった。小坪は、中世円覚寺黄梅院領としても知られ、近世は隣村の飯島村との相論資料を残し、目の前には史跡・和賀江島が位置する村である。地域の歴史理解という点では、全く知識を持ち合わせていないことを把握できた。

【①「農村」のイメージ】

- ・新潟。自然と一緒に暮らしていて農業によって暮らしをたてている。(J 1)
- ・畑や田んぼが広がっている田舎の場所(J 1) / ・孀恋村、野辺山原、三浦(J 1)
- ・稲などの作物を育てている村。農業をしている人たちが住んでいる村。(J 1)
- ・田畑。牛・馬(家畜)。なぞの石ひ(J 1) / ・田園風景。田舎(J 1)
- ・鳥居、ほこら、田畑、くわ、鎌、掘立小屋、お祈り(豊作)。(J 1)
- ・畑がある。田んぼがある。畑・田んぼどっちも大きい(J 1)
- ・はたけや田んぼが広がり、開放的でのびのびできる村(J 1)
- ・村長・田んぼがたくさんある。緑が多い・セミやトンボが多い。(J 1)
- ・畑や田で稲作が盛ん。貧富の差が激しい。(J 1)
- ・くわで田を耕す。人が少ない(J 2)
- ・田んぼが広がっている。人々が祭りなどで楽しんでいる。人々が協力している。租を納められない農民が里長などにどなられている(J 2)
- ・所有する土地が広く、田畑で作物を栽培。もしくは畜産(S 2)

【②「漁村」のイメージ】

- ・瀬戸内・東北。漁に出てそれで暮らしをたてている村。(J 1)
- ・海辺に近い村。漁業で生活している村(J 1) / ・銚子、焼津、八戸、石巻、境(J 1)
- ・魚をとる漁業をしている人たちが集まった村(J 1)

- ・魚、針、やり、網、舟（J1）／・漁をする人たちが集まった活気がある村（J1）
- ・網、船、釣り竿、人口が少なめ、塩田、お祈り（大漁）。（J1）
- ・小さな港、網、海が近くにある、船のところまで行ける橋がある（J1）
- ・船がたくさん並んであって魚市場がある。（J1）
- ・独特な塩のにおい。魚が多い（J1）／・魚をとって食べる。漁業が盛ん（J1）
- ・海の近くにある。農村と仲がいい。（J2）
- ・漁がさかん、交易も盛ん、みんな協力。祭りもけっこうはでにやっている（J2）
- ・港をもち船を出して漁をする。港の近くで魚などを売り、生計を立てる。（S2）

【③「海付きの村」のイメージ】

- ・漁と農業が中心（J1）／・生活が海に関係している村、海で仕事をしている村（J1）
- ・逗子市（J1）／・漁村、子どもや女の人貝をとったりして男の人は船で遠出（J1）
- ・海の近くにある村。海との関わりがある仕事をする人たちが集まった村（J1）
- ・海、ヒトデ？（J1）／・海から水をくみ上げて田畑の水にしている。（J1）
- ・海を使った事業、海関係のお土産（J1）／・人口が多く中心となる村（J1）
- ・魚が多い食事（めでたいときはタイなど・・・）。子どもが海で遊んでいる。（J1）
- ・水路や漁業を多くある。物などを水路を通して運んだり舟を通ったりしていた。（J1）
- ・舟で基本移動。交易がさかん。自由そう。（J2）
- ・釣りなどをして自由に暮らしている。畑も耕している。収入源よく分からない（J2）
- ・村と海の境界がなく、舟屋などがある村。漁村と同じく漁をする（S2）

③昨年度参加生徒制作による「飛び双六」体験

②を行ったうえで、展示「海付きの村」への関心をさらに高めるために、昨年度の高校生生徒が、歴博にて作成した「飛び双六」を体験させた。この双六には、生徒たちが実際に展示と向き合う際に、戸惑うであろう用語「ダイナン」や「フツキグワ」などが盛り込まれていた。マス目にある用語と説明書きが対応していることを伝え、その意味を考えさせる機会とした。また、初対面の生徒たちも含まれていたが、「遊ぶ」ことでコミュニケーションがはかれ、後の双六制作課題のウォーミングアップとなった。

（2）第三展示室での動き

①当日課題への取り組み

まずは筆者より「海付きの村」展示と『四季農耕図屏風』について解説を加えた。「海付きの村」が舞台とする村は、学校の位置する三浦半島にあるため、三浦半島の「村」と海の間わりというテーマを中心に話をした。その後、生徒個人で見学をさせ、当日課題（後掲参考資料（I））に取り組みさせた。ここでは、「海付きの村」における「生業」を考えさせることを目的とし、「はじめ」「7つのマス目」「あがり」をそれぞれ考えさせた。中1生徒の一例を以下に挙げておく。なお、「ミヅキ」「ダイナン」「オカドリ」など日頃使わない、展示ならではの用語を使用するなど、マス目を書くために、資料の細部や展示キャプションをよく読んでいたことをうかがわせるものが多かった。また、マス目を考えるためにその用語の意味と向き合うことで、用語の意味をきちんと明記してい

るものが多かった。

Q1 Answer)

テーマ) 海ではたらく人たち (百姓漁師)

はじめ: 漁に出る

- ・ミヅキ → 船の上から箱めがねでのぞいていると、海に落ちた。
- ・モグリ → 大人の男性が海深くまでもぐり漁をしていた。
- ・オカドリ → いそ取りでいそ物採集をして当時の人びとの重要な生業だった。
- ・船渡御 (夏の祭り) でもりあがった。
- ・ダイナンへと出てしまった。
- ・モグリ道具をもって漁にでたが途中なくしてしまった。
- ・ゴゾーをもって漁に出て魚をいっぱいつかまえた。

おわりに: 魚がいっぱいとれて帰ってくる。

Q2 Answer)

はじめ: 4月となり稲作をはじめる

- ・稲もみを俵につめて、水にひたす。
- ・田に水を入れながら、牛や馬をひいて田をおこす。
- ・水にひたしおわったもみは、田うえ月の苗へと育てる。
- ・6月になり村中総出で田植えをする。
- ・悪天候 → 雑草をぬく / 好天候 → 畑にでる
- ・好天の日にかぎり実った稲を総出でかる。
- ・かりとった稲をもみごと干して乾燥させる。
- ・千歯こきなどで稲からもみをとる。ふるいにかけて、玄米・もみからわら・すななどを選別する ← うみ
- ・俵をつめて年貢をだす ← 12月に年貢をだす。

②班課題への取り組み

当日課題の成果をふまえ、班ごとに「めぐり双六」を制作するよう指示した。特に、二つの展示を組み合わせてすごろく化するよう伝えた。あわせて当時の時代観を良く示すようすごろくに仕上げるよう、マス目や文言を工夫するよう伝えた。展示を組み合わせることで、知識と知識の関連性を検討し、一つの展示の内容をより深く考えることができた。展示で得た知識と今まで学んできた知識を総動員して、近世という時代の特色を浮かび上がらせる努力を各班が行っていた。

(3) 研修室での動き

①制作双六体験

各班が制作した双六をそれぞれで体験した。他班の作品評価については、一言コメントカードを準備し、アドバイスとしての感想を書かせた。以下に全実践を終えた後の感想の一部 (原文ママ) を紹介しておく。

・このスゴロクを作って短い時間でもおもしろいスゴロクが作れるということを知った。他の班がつくったスゴ

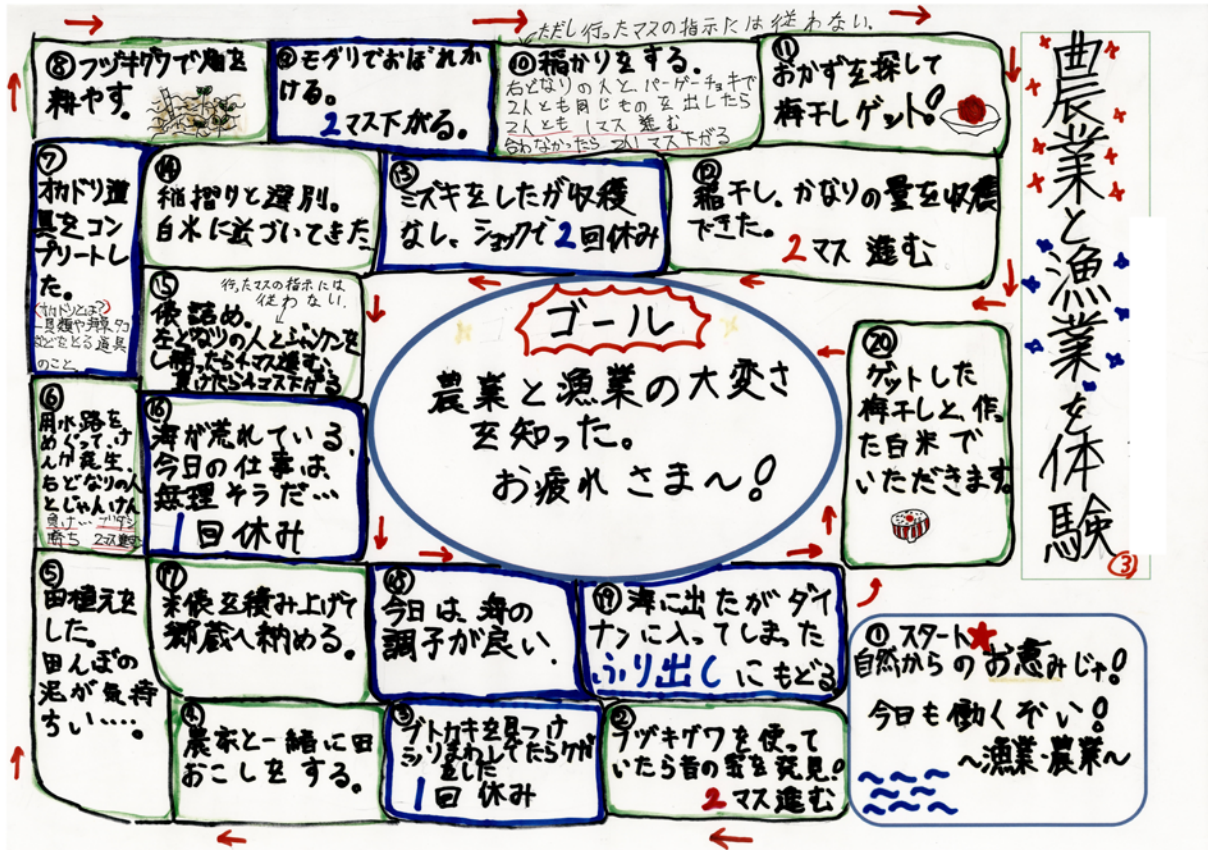
ロクもどれも独創的でおもしろいものばかりだった。またスゴロクはとびスゴロクと人生ゲームのようなスゴロクの二つがあることをこれまであまり意識していなかったのととてもためになった。(J1)

- ・佐島の農業や漁業はとてもおもしろいことを知った。モグリ漁業やミヅキ漁業のことをはじめて知った。白米を食べるまでには様々な苦勞が積み重なってできることを知った。(J1)
- ・田んぼの体験(米づくり)は、小学校でしたので、田植え・稲刈りなどのことは知っていたが、漁業は「もぐり」や「みづき」など初めて聞いた言葉が多かったので、新鮮な気持ちになった。双六も個人的に良い出来だと思ふ。他の班の双六も楽しめた。(J1)
- ・漁業・農業の手順や歴史を詳しくする機会になったし、双六で表すことでより、歴史を感じることができとても貴重な体験でした。(J1)
- ・海付きの村の最初の印象は漁村だと思っていましたが、そうではなく農業と漁業を両立させている村でした。その土地に合わせた農具を作っていました。また、いろいろな漁があるのかとおどろきました。農業や漁業に関することを書いていくとすごく厳しい世界だと思いました。気候や環境によってとても左右されるからです。(J1)
- ・フヅキグワやミヅキなど知らなかった道具や方法を知れ、双六にすることで作る方はよりくわしく知らなくてはならないし、やる方は学びながら学べた。(J1)
- ・スゴロクをやって、意外と作るのが難しかったけど、知らない人と仲良くなれる道具だと思いました！(J1)
- ・双六をやってみてみなさんは要点をまとめるのがうまい。双六を作って、マスの配置が難しいことを知った。双六をやって、双六のバランスをよく考えているなど学んだ。双六を使って、海付きの村の説明ができると思ふ。(J1)

(4) 事後課題の配布

すべての制作双六をコピーし配布した。また、評価シートのまとめ、講評とあわせて盛り込み、事後に配布した。以下は作成4作品のうちの2作品である。





5. 成果と課題

(1) 成果

- ・ 歴博ならではの展示である第三室「海付きの村」展示と『四季農耕図屏風』をあわせて活用することができた。また、双六づくりを通して「展示資料の読み取り」という点で、新たな歴史の学び方を提案することができた。
- ・ 一つの展示を双六化するのではなく、展示と展示を組み合わせることで、展示と展示を比較する力や展示と展示に共通する時代の特徴などをまとめる力を養うことになった。また、展示や資料の細部を主体的に読み取る姿勢を学ぶことのみならず、展示の比較を行うことで資料の比較という歴史研究の初歩を学ぶことができた。
- ・ 双六化の過程を通して、自分自身の意見と他者の意見とをすりあわせることで、多様な視点をまとめることができた。
- ・ 近世社会の「村」に関する基礎知識を確認することとなり、大きな時代観をつかむことができた。
- ・ 領土問題に限らない「海洋教育」の、一つの授業のあり方を提案することができた。

